

危機

名古屋経済大学スキー部

毎年四月、名古屋経済大学のスキー部は他の部と同様に新入部員の勧誘活動を行います。しかし私たちを最後にスキー部には入る人がいなくなりました。普段のトレーニングを見学に来てくれても一人ぐらいいです。勧誘の方法が悪かったり、スキーをやりたい人居ないとか、部活に入る人少ないとか、原因は色々あると思います。私たちが大学に入学してこのスキー部に新入部員として入った時すでに、スキー部の人数は、当時の四年生四人だけでした。スキー部に入って一年たち、先輩が卒業してクラブを自分たちで運営していかなくてはならなくなつた時、残りの部員は戸惑いました。しばらくたつと普段のトレーニングにはあまり人が集まらなくなり、ある部員にいたつては大学内で会うことや、電話で連絡すら取れなくなりました。その部員はやがて部を辞めました。部員が一人減るといふことはある程度人数が居ても影響があると思います。部員の少ない我々のような部にとっては、影響は少ないかもしれませんが。その出来事をきっかけにすっかりやる気をなくしてしまう者も出てきました。そしてその状態を改善できないまま、シーズンに入り、合宿を行い、第四十九回の中部インカレにそなえました。

中部インカレも無事終わりしばらくたつと、一人の部員が部を辞めたいと言いはじめました。その部員はその後の春合宿にも参加しませんでした。彼は何とか部に残ることになりましたが、以前のように部に協力的でなくなりました。そして、新しい年度が始まり、また新入部員が入ることなく新しい一年が始まりました。普段のトレーニングは、以前よりも増して部員全員が集まることはなくなりました。

今、スキー部は存続の危機を迎えています。今、部員は四人、全員三年生のみ、四年になり、卒業したら部は完全になつてしまいました。この状況を立て直すのは難しいかもしれませんが、勧誘を諦めず続け、スキー部をのこすことができたらよいと思います。

日頃の活動および感想について

名古屋工業大学体育会競技スキー部

部の概要

僕たち名古屋工業大学体育会競技スキー部は普段は週二日または週三日練習をしています。内容はバスケ、サーキット、筋トレなどです。バスケやサーキットはスキーに必要な瞬発性の筋力を高めるために、筋トレは絶対筋力を高めるためにしています。冬は十二月の半ばぐらいに本格的な合宿の前に滑り込みとして北海道ニセコスキー場へ行き練習をします。合宿をはるところは基本的に妙高赤倉で、練習の後直接岩岳に移動して大会に出場するといった形です。

選手権大会について

僕はまだ三年生で現役ですが、去年、一昨年の大会では他大学とも協力できて協力ということの大切さを知ったと思います。この協調性は他の部活の大会では得られないもので、欠けがいのないものだと思います。すごく大切にしていきたいです。実際レースに出たときの感想としては、やっぱり最初緊張しましたね。それで、「いざスタート！」ってスタートするとやっぱりゴールするまで頭の中は真っ白って感じます。「やっぱり日頃からの練習で体に染み付いた動きしかできひんねやな。」って思いました。だから練習は大切なんだと思います。

現在の部活動と将来性

僕は今まで二十年間こんなにも夢中になれることはありませんでした。一年生の冬にアルペンスキーを初めてして、それ以来時間のあるときはいつでもどこでもスキーのことばかり考えていて、今まででこれ以上ないといえるぐらい一番輝いていると思います。将来性について非常に素晴らしいものを得られています。具体的には、大会のときに得られることもあります。それ以上に普段の部活、コーチや先輩とのコミュニケーションで社会に出てからの上司に対する態度とか、どうすれば人間関係を上手く作り持続させられるかを非常に効率よく勉強できていると思います。僕はここ名古屋工業大学に入学しスキー部に入って本当によかったです。そうでなければ、今のコーチや先輩とも出会ってなく僕はどうなっていたのだろうと思います。だから僕が今引退張っている部活（コーチ、先輩方、同僚、後輩達を含む。）にどの部にも負けない強い自信を持ち、それを誇りに思いません。

中部日本学生スキー選手権大会記念誌

金沢大学体育会スキー部

中部日本学生スキー選手権大会五十周年おめでとうございます。この大会が五十年の間OB・OGの方々により受け継がれ、我々が出場させて頂くことができることが、大変ありがたく、そしてうれしく思います。

さて、我々金沢大学体育会スキー部は、現在のところ現役員総数十五人で活動しております。前期の間は、週四日間の陸上でのトレ

ニングを行っています。たまに、水中でもトレニングしています。陸上トレニングでは、走りこみやインラインスケート、ローラースキーや筋力トレニングのほかにも、サツカーやバスケットボールなどを行い、基礎体力の向上を目的に活動しています。そして、後期に入った今現在というところ、サツカーバスケットは相変わらず続けて行なっておりますが、アルペンとノルディックにわかれそれぞれの競技に合わせたトレニングを行っています。

理系離れが囁かれ、スキー離れが嘆かれている今、我々スキー部には理系の学部生徒も多数在籍しています。理系の分野もスキーもそうです。やはり外から見ているだけでは、楽しさが伝わらないのが避けられる要因と考えています。やってみて初めてわかる楽しさをスキーは、ひめていると思います。理系の分野が一般向けの実験などを行い、基礎知識の無い子供に、その分野の最先端、つまり一番おいしい所、を見せ興味を湧かせようとしています。やはり基礎知識なしには、おいしい楽しいといっても意味不明でしょう。スキーも基礎トレニングなしで一番おいしい所を見る、つまりスキーを自在に操ることはできません。スキーも車も数式も自在に操るということは、激しく難しいものです。しかし、自在に操れた時の喜び、そこからの成長の過程、これは何ものにも変えがたいものです。つまり、一度触れてしまえば、もつと自在に操りたい、もつと速くなりたいと意欲がもりもり湧いてきます。上達の過程でツライこともあり、そのつらさを理由に避けられたりしてしまいますが、この上達の過程こそが、やってみなければわからない楽しさであると思います。スキーや車や数式、これらを手足のように扱うのが、もし簡単であったならば私は、それらをしていなかったでしょう。例えるならば、誰も息を吸う練習などしません。それは練習の必要が無いほど簡単だからです。息を吸うことができ、誰が楽しいと感じるでしょう？

自分でも何が言いたいのかわからない文章になってきていますが、我々スキー部一同は、スキー人口の増加のために、まず誰かれ構わず一度経験させる、入り口で迷っている人の背中を押してやる、そして、上達の過程で苦しんだり悩んだりするのが嫌だ（私はああで

もないこうでもないとか試行錯誤して悩むのも上達の楽しみの一部だと考えていますが」というのなら、自分が悩んで出した答えを参考に、スムーズに上達できるように指導する、つまりはスキーに対する敷居の高さを下げることに、これがスキーに関わりスキーに楽しさを教わった人間としての責任と考え活動していくつもりです。

四日市大学スキー部の紹介

四日市大学スキー部

私たち四日市大学スキー部は第四十九回大会から参加をさせていただき、今回五十回大会で二回目の参加となります。二回目の参加でありながら第五十回の記念大会に参加できることを嬉しく思います。前回大会では、初参加でしたが一つ一つの滑りを大切にして三部で優勝することができ今大会では二部になることができました。今回大会は四年生の四人の少人数での参加となりますが、五十年の歴史を思いながら自分の最高のスキーをしたいと思っています。

私たちの部は部員八人という部員の減少という現状を抱えて活動しています。部員私たちはオフシーズンでは週に二回と少ない練習のなかで、体力づくりと球技を中心に行っています。仲間同士のつながりが強く、集中し行えています。部員同士のつながりだけでなく、部としては一九八八年に創立をしていますが、一期生から去年の卒業生のOB・OGの方々が合宿や練習にも顔を出していただき、卒業生と現役生のつながりもこの部の特徴です。そしてシーズンの合宿は長野県の本郷スキー場で冬合宿、春合宿で一ヶ月半ほど行っています。スキースクールの先生から教えていただき、スキー経験がない部

員がほとんどのスタートからですが、個々のスキーの技術はもちろん、長期間の共同生活も通し人間性も鍛えています。大会では本郷平スキー場で西日本学生スキー選手権や長野県知事杯争奪本郷平スキー選手権などに参加をしています。また夏合宿では、伊豆の海でスキューバダイビングやバーベキューを行うなど楽しい一面もあります。大学生の四年間の中でスキー部の一員として活動していくことは、自分のため、部のためとても大切だと考えています。

中部日本学生スキー選手権五十回記念

愛知工業大学競技スキー部

主将 大口 潤

中部日本学生スキー選手権大会が、今年で五十回を迎えられることを、心よりお祝い申し上げます。

中部日本学生スキー選手権は、僕たちがまず目標にしている大会であり、シーズン始めの非常に重要な大会だと思っています。このところ暖冬が多く雪不足にも何度か悩まされていますが、大会役員の方々ははじめとして、多数のOB役員のおかげで、五十回という回数を重ねてこられたものと思います。

この中部日本学生スキー選手権大会、通称「中部インカレ」は、他の大会とは違って、自分たちもいろいろと動かなければいけません。初めてこの大会に出場した時は、旗門員をすることにまず驚きました。そして更に、それに伴う試験があることにも驚きました。また、この大会に力を注いでくれるOB役員の数にも驚き、この大会の意義をすごく感じたことをよく覚えています。

そんな中、役員方の期待通りの動きが出来ずにご迷惑をかけていると思います。やはり、自分たちの大会なので、自分たちが一番一生懸命に動かなければならいはず。勝負も大事ですが、それ以前の取り組みや、この大会への姿勢が非常に大切だと感じています。そんな気持ちで臨めば、きっと素晴らしい大会になるでしょうし、僕らの心の中にも一生刻み込まれることと思います。

ここ数年、大会に参加する人数も少なくなり、僕たち競技スキー部の人数も減ってきました。この五十回記念大会を機に、スキー界を盛り上げるべく、もつと元気を出さなければと思います。シーズンには数多くの大会がありますが、やはり僕たちにとって中部インカレは特別な大会の一つです。そのような大会を素晴らしいものにするために、一生懸命取り組んで、笑顔でこの大会を終えたいと思っています。大会役員の方々や、OB役員の方々にはご迷惑をおかけするかと思いますが、今後ともご指導、叱咤激励をどうぞよろしく願っています。最後にになりましたが、中部日本学生スキー連盟、中部日本学生スキー選手権大会のますますのご発展を心より祈念いたします。

中女の維持とプライド

中京女子大学競技スキー部

私は、中部インカレにできることによつて、他の大学の人たちと仲良くなるきっかけを作ることができました。役員や選手、卒業生など、全員が一体となって作る手作りの大会だからこそ、競技として競う場であるとともに、交流の場を持つことができるのだと思います。私たちの大学は女子大なので、人数も少なく、役員を出したり手伝ったり

するのに人手が足りなくて大変でしたが、男子だけしかない大学や、友達がいる大学と協力して大会運営に参加することができました。そういうことがきっかけで、友達を増やすことができました。また、この中部インカレで知り合ったことがきっかけで、地元に戻ってから会う約束をしたりなど、親交を深めることができました。

私たちは今回三連覇を目指して日夜練習に励んでいます。人数が少なく、普段学校で練習する場所も限られていますが、私たちは、「自分が大学にいる間は勝ち続ける」を胸に秘め、中女はスキーも強い！！というところを、世間様に知ってもらいたいです。優勝カップをみると、三十年ほど前には、何年もの間、中女の名前が刻まれています。伝統ある大会で、伝統ある中女スキー部が、また何年も勝ち続けて優勝カップに名前をたくさん刻んでいきたいです。中女の維持とプライドにかけて、今年も連覇を狙っていききたいと思います。

OBやOGの方々にはすごく感謝しています。この大会は、OBやOGの方々がいてこそ成り立っていると思います。今役員をやっている方々も、多くは中部インカレで活躍していらっしやと聞いています。現役の選手をサポートしてくれる人がこんなにもいるということは、とても心強いし、感謝の気持ちでいっぱいです。私たちも、卒業してもこの大会に関わっていききたいと思います。

中部インカレは伝統ある大会です。しかし、その陰ではスキー人口の低下に伴う参加選手の減少もまた、この伝統ある大会の存続を危ぶませる要因ともいえます。私たちは、この伝統ある大会に参加できることを誇りに思っています。中部インカレを今後も発展させていくためにも、私たちが今、そして今後何ができるかを考え、実行して、この大会の歴史の一ページに私たちの名前を残したいと思っています。そして、中部インカレがこの先もずっと続いていくことを願っています。

中部インカレと長大スキー部

長野大学体育連合会競技スキー部

主将 新谷 起世

中部インカレは私達長大スキー部にとってシーズン初めの大会であり、毎年とっても新鮮な気持ちで出場しています。中部インカレは長大スキー部の中で、部員全員が揃って、皆で出場できる大会です。一年生にとっては入部して初めての大会で、先輩やコーチと宿を共にし、レースに挑んみ、学ぶことが多い場です。

中部インカレは手作りの大会。といわれるように、役員の方々や私達スキー部の手によって運営されています。そのため、大会の時にOB役員と学生役員を出さないといけません。昨年、私達は男女合わせて三名の出場で、代わる代わるに旗門員をしていても、どうしても穴があいてしまう状況でした。そんな時、私達を助けてくれたのが福井工業大学の皆さんでした。彼らは、困っていた私達に嫌な顔一つせず、手を貸してくれました。この場を借りて、改めてお礼を言いたいと思います。本当にありがとうございます。

こういった他大学との交流があることも、中部インカレの素晴らしきことの一つだと思います。

また、私が一番「中部インカレってすごいな」と感じたのは、今年の六月のことでした。「今年、五十回記念大会でOB・OG大会を開催するためのお手伝いに名古屋に行きました。そこで私が目にしたのは、本当に一人一人の役員の方が手作業で、一つ一つの作業をしていました。本当に手作りの大会なのだ、強く実感しました。手紙を折るのも、宛名を貼るのも全部手作業でした。その姿を見て、私達も共に作業をしてみても、今までの考えがガラリと変わりました。OB役員

や学生役員を出すのが面倒だと思ったり、それでペナルティがつくことがおかしいと思っていた部分がありました。それも一つのやり方で、中部インカレの大会の運営の仕方なんだと思いました。

私達長大スキー部は、中部インカレを通して、多くのことを学び、貴重な体験をたくさんしています。私達の先輩方もきつとそうだったと思います。そして、後輩達もそうであってほしいと思います。これからもこの関係を大切に、中部インカレがずっと長く続いて欲しいと思います。

中部インカレの想い出

愛知大学体育会競技スキー部

中部インカレも今回で五十回目を迎えることになりました。僕達、愛知大学体育会競技スキー部の中部インカレに対する思い入れは強く、この五十年間も続くということに驚き、そして嬉しく思います。

中部地区で行われ、中部地区の大学だけが参加出来る大会は、中部インカレが唯一無二の大会であり、今も昔も非常に重要な大会と位置付けています。中部インカレの五十年という歴史は、そのまま僕達の競技スキー部の歴史であるといえると、思います。僕達の先輩が、今まで二部であった愛知大学を一部に上げ、そして一部を維持し僕達にバトンを渡してくれました。このように、中部インカレと共に僕達は歩んで来ました。僕達はこの大会を次の世代まで残し、そしてこれからも中部インカレと共に歩んでいきたいと思っています。

現在は、スキー人口はどんどん減少し続けています。そのため、中部インカレという伝統ある大会の存続も危ぶまれるという非常事態

に陥っています。もしこの伝統ある大会が無くなってしまったら、五十年という長い歴史が途絶えてしまうだけでなく、僕達の先輩達がこの大会とともに歩んできた、愛知大学体育会競技スキー部の歴史もある意味途絶えてしまうのではないかと感じます。その様なことは、決してあってはならないことであると思います。

中部インカレという伝統ある、唯一無二の大会を今後も続けていくためにも、私達一人一人がこの大会の重要性を理解し、努力していきたいと思っています。そして、今後もこの大会と共に歩んでいきたいです。

素晴らしい思い出

中部大学スキー部

門 千博

中部日本学生スキー選手権大会を通して、私は一回りも二回りも人間を大きくしました。

大会に参加するに当たって、事前の合宿・道具の整備・宿での生活態度など、どれをとっても将来に必要不可欠で、本当にスキーを続けていて良かったと感慨に浸ります。これから社会に出て一社会人として働くわけですが、縦社会の面影が残る日本で生き抜く力を養い、目上の人間に対する態度・後輩への教育の仕方などはすべて部活動から学びました。

”自分の子供が生まれる将来、

愛する子供にスキーを教えたいですね。”

私の大会での思い出は、やはり大学二年生の時、中部日本学生スキー

ー選手権大会二部から一部に昇格したことであり、それは同時にチームの優勝でもあり私自身の優勝もあり、最高の時間でした！

今振り返っても鳥肌が立つようなレースの思い出です。同じ部活の一期上級生の先輩との一騎打ちになった十五Kmフリー競技は、五秒遅れで私がスタートし、「必ず付いて行き、最後に追い越す！」と、歯を食いしばって走り続けました。互いに一步も引かないレース。私が抜けば先輩がまたバンフライをかけて追い越す、という一瞬も気を抜けない緊迫したレース展開で、私と先輩は笑っていました。それまで、互いの本当の実力を暴かなかったのですが、レースで本気になればなるほど互いのレベルが近いことに気がつくのです。

それはもしかしたら、たどり着いた人間にしか解らない世界なのかもしれません。スピードを超え、並走に近い感覚で、それはまるでツリーリングを楽しんでいる気心知れた親友の遊びの一環の様な感覚で、私達はレースというよりもその瞬間紛れも無くスキーを楽しんで愛していました。先輩後輩をとおりこして、合宿でのつらい事も忘れ、何もかも凌駕していました。大げさな表現ではなく、本当に・・・やがて、ゴールを直前に控えリードしたのは私でした。きつとほんの少しレースを意識しなおしたのが早かったただけでしょう。一時は、私も「勝敗にこだわらなくてもこのレースの価値は変わらない」と、思っていたぐらいですから。〇・二秒先にゴールしたものの、少し落ち着けば互いに握手を交わし、抱き合いました。あのレースは一生涯忘れません。自分の思い出として将来の励みに強く生きて行きます。

朝日大学学友会スキー部について

朝日大学学友会スキー部

経営学部二年 鈴木 香菜恵

朝日大学学友会スキー部は、OB・OGの方々との絆が強く、伝統ある部です。コーチに指導してもらい、スキーを練習するのはもちろん、人間性の向上にも力を入れていている部活です。人を大切にし、礼儀を重んじていく勉強になる部だと思っています。

年々スキー人口が減ってきているとよく耳にします。私達朝日大学学友会スキー部は、スキーを通じて得ることが出来る強い絆を後輩たちにも伝えたいと思い、小さいことではありますが朝日大学学友会スキー部の部員増加に力を入れています。そうすることで、今後スキー人口が増加し、より実りある中部日本学生スキー大会につなげていけたら幸いに思います。

ここからは個人的ではありますが、私自身のスキー部での思い出を述べていきたいと思っています。

大学に入ると一人暮らしの人が多くなるので、実質家族よりもスキー部と一緒にいる時間のほうが長くなってきます。冬になるとなおさらです。だからこそ、スキー部のみんなは家族のような存在です。時には先輩から厳しくしかられ、時には同級生と励ましあい、時には後輩をしかり、そうしてみんなで辛いことを乗り越え、涙を流してききました。だからこそ他のサークルや部活にはあまり体験できない感動を得ることが出来ます。楽しいときはみんなできごとんわいわい騒ぎ、嬉しいことがあるとみんな喜びます。それも、今まで乗り越えることが出来た体験があったからだと思えます。朝日大学学友会スキー部は経営学部、法学部だけではなく歯学部も一緒に仲間として活動して

いる部活です。いろいろな勉強をしている仲間と触れ合うと、刺激にもなりとても勉強にもなります。

こんな最高の部活で四年間過ごせるのはとても幸せだと思つていきますこれからも、最高の仲間と共にスキーを頑張っていきたいと思つてます。

中部インカレは成長の場

愛知学院大学スキー部

三回生 久田 友和

中部日本学生選手権五十周年記念大会開催おめでとございます。愛知学院大学は毎年、中部インカレに参加させていただいております。今年は五十周年という節目の年ということで、このような記念の大会に出場できることを誇りに、そして楽しみにしています。五十年という年月は私たちが生まれる前から行われている大会で、これだけ続いているということはそれだけこの大会が、みんなに愛されている大会だと感じます。

私たち愛知学院大学は毎年、上位入賞を目指し頑張っています。中部インカレはシーズンインをして一番はじめにある大切な大会なので、一同、この大会に目標を合わせて日々努力をしています。大学から競技スキーを始める人にとつて、最初に出場する大会でもあるので一年生もとても気合いが入っています。毎年やってくる中部インカレは、自分の成長を見ることが出来る絶好の機会でもあります。はじめは、ポールというモノが怖くてたまらない存在だったが、学年が上がるごとに徐々に恐怖心から闘争心へシフトチェンジをして、より確

かな勝利へと意識が変わっていきます。

この大会は、コンセプトが手作りの大会で、書類や連絡などの提出、役員会など正直大変です。しかし、この大変さが後々社会に出たときに、必ず役に立つと先輩にお聞きし、なるほどと思いました。社会に出る前にこのような貴重な体験ができ、今では逆にうれしく思っています。また、中部インカレは、普段仕事や勉強などでなかなか会うことのできないOB・OGとの交流の大切な場所でもありますし、なんといっても先輩方と一緒に作り上げていくという感じが好きです。このような手作り大会はこの先、六十年、七十年さらには百年大会と続いていってほしいと思います。そんな中部インカレに私たちもその新たな歴史の一ページに名前を刻み、そして次の世代へ繋げていけるいいと思います。

中部学生一部総合優勝めざして

福井工業大学スキー競技部

私達、福井工業大学スキー部は毎年、中部学生大会で個人、団体の好成績を挙げることが最大の目標に置き、部員一人一人が日々努力をしています。

二部昇格が決まった一昨年から、部員のより高い競技力と、精神力を得るため、付属の福井高校と合同練習、合宿を行えるようにしていただきました。また、福井工業大学として、地元福井県のスキー連盟に登録し、少なかった大会経験を近隣で多く積めるようにしました。これにより、大会の雰囲気慣れることや、中部学生大会で部員のする仕事の分担などの予行も行えるようになりました。オフシーズンに

なると、部員は冬期シーズンのために毎日アルバイトで働くようになり、練習会で部員全員が集まることはほとんど無くなります。そういったこともあり、練習での活気が薄れそうになることもありましたが話し合いを欠かさず行うことで、少しの人数でも活気が失われなくなりました。以上の新しい活動により、本番で、自分の力を発揮出来無いいという状態は少なくなり、プレッシャーの掛かる大会でも、部の雰囲気も良く、最高のパフォーマンスを発揮出来るようになりました。そして、昨年の中部学生大会での一部昇格という最高の結果に繋げることが出来ました。

中部学生大会一部昇格の際は、可愛がっていたながら、私達が出来になれず、悔しい思いをした先輩方の顔、私達が良い成績が上げられるように、コーチをしていただいた方々の顔が思い出され、部員全員が、表現できないほどの喜びと、感動を感じ、忘れられない大学生活での思い出になりました。

日々の生活面でも、大会、合同練習、合宿での集団生活を行ったことで、授業を的確に受ける能力の発達と、何事にも積極性が現れるなどの良い成果が上がるようになりました。これから始まる就職活動においても、スキー部としての経験を生かして、的確で、積極性のある態度を示せればと思っています。

今年から二部制となったことで、一部・二部の競争率がより高くなり、一部残留も難しくなると思いますが、今シーズンの目標を「昇格一年目での中部学生大会一部総合優勝」に置き、部員一丸となって努力を積み重ね、臨みたいと思います。

手作り大会の伝統

名城大学体育会スキー部

主将 高橋 優 樹

中部日本学生スキー選手権大会も今年で五十回目ということで、私たち現役の選手もこの記念大会に参加できることはとても喜ばしいことだとも思います。私たち名城大学体育会スキー部は、部員五人のアルペンのみで経済的な面などで入部されない学生が多いのが現状です。しかし、今年一年生三人入部してくれ、うち、二人は初心者ではあるが、やる気は十分あると感じられるので他の部員も気合入ります。年間の計画として夏場は、学校の体育館や近くの公園でトレーニングを行い、十二月上旬に雪を求めて北海道へ行き、一月にこの大会に出場します。その後は全日本学生や各地方の大会等に出場します。私はこの大会には、昨年初めて出場し感じたことは学生と役員が協力し合い行われる大会だと思い、レース以外に仕事をする事によって役員や大会運営側仕事内容や気持ちが変わるし、今後自分が役員になったときは、この大会で勉強したことを活かしたいとおもいました。昭和三十一年の発足以来半世紀にわたるこの大会、今までに関わってきた方々の歴史や活躍及び思い出と多くの人の想いと関わりで継続されていることを理解し、次の後輩たちにもこの伝統を伝えていきたいと思っています。

中日大会を関して学んだ事

岐阜薬科大学スキー山岳部

当大学の学生の出身地を見てみますと、全国各地様々で、私達の部活も例外ではなく、東京都、長崎県、富山県、愛媛県とそれぞれです。そのため、部員の中には、この部に入るまでは、スキーをした経験は全くなかったという人が、大半を占めています。しかし、先輩方の熱心なご指導の下、部員たちは、目を見張るように上達していています。

毎年、中日大会の一週間前くらいに合宿を、四泊五日で行っています。この合宿では、中日大会に向けて、クロスカントリーレーの練習や、ポールを使って主にジャイアントスラロームの練習をするなど、基礎にとどまらず、競技を意識した練習も行っています。

一年生は、この合宿が、雪上での初めての本格的な練習となります。そして、わずか、一週間後に、中日大会に臨むこととなります。そのため、中日大会は、他校との競技というよりはむしろ、自分との戦いの方が大きいと思います。ただ、やはり、他校の人達の滑りに直に触れることで、自分達のスキー技術の向上心の励みになります。だから、中日大会は、私達にとって原点に帰る場所だと思っています。

三年生にとって、この大会は、幹部として向える最後の大会になるため、その思いは、ひとしおです。

中日大会を関して私たちが学んだ事は、スキーに対するひたむきな情熱だけではなく、スキーを通して人間性が磨かれる事です。

最後に、この中日大会で得た経験や、知識や、人間性といったものは、将来必ず自分たちの財産になると思います。

中部学生に学ぶ

北陸大学競技スキー部

第五十回記念大会を迎えたこと誠におめでとうございます。この記念となる年に我々が選手として出場できること、大変嬉しく思っています。

我が部にとって、毎年シーズン幕開けで初戦となるのがこの大会で、そのシーズンをまさに占うかのように方向づけをする重要な大会がこの中部日本学生スキー選手権大会であった。数ある学生大会の中でも、この大会は名城大学に本部が置かれ、選手が大会運営に関わるなど「手作り」という強い意思を持ち、我々がスキーヤーとしてまた社会人として、学べる場所でもあった。また、この大会ならではの旗門員試験では、アルペン初心者的一年生に旗門員や競技のルールを教えることでアルペンを学ぶ絶好の機会にもなっている。

今年で五十回目ということだが、年々各大学の部員が減少していることは事実で、これからの大会開催に不安はあるが、連盟、選手、OB・OGが一丸となつて、さらなる発展を目指し、伝統を築いていくて欲しい。

中部インカレ出場に関して

名古屋工業大学体育会競技スキー部

四年 杉本章 悟

私が初めて中部インカレに参加させていただいたのは三年前、一年生のころになります。競技スキーを始めたばかりでコースの難易度や参加選手の気合いに圧倒され、心拍数が上がりっぱなしだったことを鮮明に記憶しています。今思えばその後スキーの上達を目指す中で常にこの記憶と戦い、あの時のようにならないようにしようと思いつけてきた感があります。私のスキーを支える一つの柱であり、また現在までに参加した選手の多くがこつした思いを持っていることは間違いないでしょう。今年五十回を迎えるこの大会が今後も続き、多くの学生の思い出となつてほしいと思います。

三年 岸本真吾

一年生として入学してきて考えることなくスキー部に入ってからはや二年。気がつけば僕はスキーのことしか考えてないくらい部活に力を注いでいた。そして今年も間もなくその季節がやってくる。今年は授業をもサボつてスキーに行くつもりだ。メインの大会でベストを尽くせるようになるために・・・。メインの大会はもちろん「インカレ」のことだ。「インカレ」というすばらしい大会のために今年も情熱的な心を持って持てる時間をスキーにかけたいと思う。

三年 布目 和徳

自分は今回で中部インカレ三度目の出場となります。やはり、大会に出る最大の醍醐味はスタート前の気持ちの高揚や緊張感を味わえることだと思います。そして持ち前の勝負弱さとの戦いにも目が離せません。高校までは野球部、大学ではスキー部でこのような勝負の醍

趣味を味わってきましたが、この勝負の楽しさをスポーツだけでなく人生全体で味わえるような勝負師として生きていきたいと思えます。勝負弱い勝負師なんてカッコ悪いので、この中部インカレで持ち前の勝負弱さを克服し、勝負強い勝負師として輝いていきたいところです……

二年 飯島 大輔

ついにやってきたこの季節、冬！！僕自身にとって冬は、大げさに言うとききてよかったと思う季節であり、スキー自体は僕の生きがいだ。その中でも中部インカレは今までの自分の努力を表現する場でもあり、とても重要な行事だ。昨年、一年だった頃は、ただただがむしゃらにスキーを楽しんで滑っているだけだった。しかし、二年という今年は、来年、再来年につなぐことができるよう、技術面、精神面共に鍛え、中部インカレに挑んでいこうと思う。最後に、今年の中部インカレは自分が主役であるかのように熱い大会に僕自身がしてやります！！

二年 中村 和貴

スキー部での活動は二年目になりますが、昨年は合宿に参加することができなかったため、今年初めて大会に出場することになっていきます。合宿、大会ともに初参加なので、今から非常に楽しみにしています。合宿では怪我をしないように全力で取り組み、昨年できなかった分を取り戻すくらいの気持ちでのぞみ、多くのことを学び、身につけようと思っています。大会では合宿で身につけた術を十二分に発揮して、満足のいく結果を出せるように頑張りたいです。

二年 田中 克典

昨年は、体の調子が思わしくなくて、スキーを滑ることが全くできませんでした。しかし、今年は体調の方を整えて、まずまず好調を維持しているので今年は思いっきり楽しくスキーをしたいと思えます。スキーの技術は、初心者に近いので、頑張つて練習をして、少しでも自分のスキーの技術を向上させたいです。そして、その成果をインカレという場で、力の限り発揮して、少しでも成績の上位の方にいきいんでいけたら、このインカレが今年の冬……思い出として残ると

思っています。

二年 多賀 千陽

待ちに待った冬が来ました。大好きなスキーの季節です。スポーツは基本的に何でも好きですが、スキーは幼い頃から家族でよく行っていて今では一番好きなスポーツです。私は中高一貫の学校に通っていて6年間基礎スキー部に所属していました。大学にはいつて迷わず競技スキー部に入り、競技と基礎ではいると違いがあつて戸惑うところも多いけれど今では競技スキーができてすごく嬉しいです。大学一年の冬は大学を休学していたため合宿に参加できなくて今年が初参加になりますが、インカレにも出られるし本当に楽しみです。よい結果を出せるように頑張りたいです。

一年 宮野 真一

”インカレ”という大会に出場するに当たって、まず思うことは多くの方々へ感謝したいということです。大会を運営するに当たって当日たくさんの方々の競技役員の方や競技の補助にあたってくださる方々、並びにグレンデを提供して下さるスキー場の方々、そして当日までの準備をしてくださった方々と、その他大会に関わる多くの方々、さらに身近な方としてスキーの指導をして下さる方々、さまざまなお世話話になっているOB・OGの先輩方、部内で指導してくださった先輩たち、そして何より両親に感謝したいと思います。経済的に独立しきつてない今、その助けがなくては今スキーはできませんし、もとより今スキーが出来る体があるのは両親のおかげであります。それら多くの方々への感謝の意を、自分のパフォーマンスで示したいと思えます。

一年 寺澤 正裕

今年、大学に入った自分はスキー部に入部した。高校ではバレーボールをしていたわけだが、大学に入ったんだから違うこともやってみようと考え、スキーを選んだ。ただ、実を言うと競技スキー部であることを全く知らなく、しつたときには少し戸惑った。なぜなら小学校のころの事故が原因でスピード恐怖症になってしまったからである。事実スキーに行ってもある程度速くなると、足がすぐみブレイキをかけてしまう。こんな自分が本当に大会で成績を残すことが出来るの

か！？と思いつめたこともあったが、今は違う。怖くないといえは嘘になるが、何事もやってみなければ結果はわからない。やる前から「これはダメだからやらない」「できないものはできない」といつていては、なにも始まらない。この冬、インカレに出ることによって自分ができるように変化するか楽しみだ。

中部学生とは

金沢工業大学スキー部

三年 小林 佐登史

本大会は、一月初旬ということ、シーズンに入ってはじめての大会であり、大学から競技スキーをはじめた部員にとって、合宿を挟んで最初の大会ということ、私も大学に入ってから競技スキーをはじめたので、本大会に出場したときは、スタートの仕方など、その時初めて教わったのでちゃんとスタートできるのかと、非常に緊張したのを覚えています。また、競技スキー経験者にとっては、今までの成果を最初に発揮する舞台なので、気合の入る大会でもあります。また、大会が毎年、開催されているのは大会の運営、コース設営・旗門員など、連盟の方々、さまざまな大学のOB・OGの方、企業の方や選手との協力によって、本大会はなりたっているのだと、毎回感じることができます。

年々、どの大学でも部員数が減ってきている状況で今後、本大会の出場選手の減少や、運営するにあたっての人員が少なくなってしまう開催するのが困難になってくるのは明らかですが、将来的には、各大学などでスキーの良さなどアピールをして、部員の人数を増やし大会を盛り上げていければよいと思います。

四年 亀谷直希

大学に入って初めて競技スキー部に入り、なおかつクロスカントリーという種目ということで大会に出ても大丈夫かという心配がありました。中部インカレは一年目では初めての大会であったことや、年間を通しての初めての大会であることからシーズンが始まったという気持ちにもなり、大会中はとても緊張しました。また大会慣れをしていくことに関しては気持ちを高める良い場でもあると考えています。

今年で四年生となり今までいろいろな思い出がありました。一年目は大学の数も今まで参加した中で一番多くリレーでは参加できませんでしたがすばらしいレースを見ることができました。多くの人の参加により周りが上手い人ばかりの中での試合だったのでいろいろな面でいい経験ができたと思います。二年目はリレーのメンバーに選ばれ自分の力を出し切ることができました。しかし年々参加大学が減っていくのが寂しく感じました。三年目は雪不足で初めてスタート場所が変わり戸惑いました。また雪の質も悪く、けがをしてしまうアクシデントもありました。その中でも後輩がクロスカントリーに入ってきたこともあり、先輩らしく後輩のことを考えながらの大会になったこともいい経験だったと思います。大会にただ参加していくのではなく参加する選手や大会役員の方々がコースの設営を行っていくことから大会を作り上げていく大変さも中部インカレという場で経験できました。また周りの人の支えによって大会が成り立つていくことから支えていただく人の大切さを身にしみるほど感じました。これからも中部インカレは続いていくと思いますが選手の人材は大会ができることの大切さをこれからも感じとり支えていく立場になれることが望ましいと考えています。

さいごに社会にでも中部インカレで経験してきたことは生かしていきたいと思えます。